滝沢克己における回心理解

――ルイス・R・ランボーの研究方法論を基にして[1]――

高　木　政　臣

1節：はじめに

回心とは一体どのような体験なのか。この問いに対して、回心研究の第一人者であるルイス・R・ランボーはひとつの道筋を示している。彼の研究は、人がキリスト教を求めて歩みを始め、特定のキリスト教会の教会員となるまでの過程を詳細なモデルによって示している。彼の研究の新しさは神学、心理学、社会学、人類学という異なる学問領域を統合する形で回心モデルの構築を行ったことにある。それがホリスティックな回心モデルであり[2]、約30年前に立てられたにも関わらず、現在に至るまでの回心研究に影響を与え、多くの研究者がこのモデルを踏まえ回心体験の検証や考察を展開している[3]。

スコット・マックナイトは20世紀における最も完全に近い研究としてこの回心モデルを評価している。ランボーが行った研究において大切なことは、回心という体験を聖なるものとして十分に配慮しつつも、社会学的観点から調査した研究であるという[4]。さらに回心が社会的な力や心理学的衝動には置き換わらないという見解、また彼が個人の信仰を踏みにじることをしないという姿勢を評価している。

またこのモデルに基づいてアウグスティヌスによる回心体験の考察を展開しているキム・ドンヨンは、ランボーの研究を、人間の宗教的変化における複雑で多面的な要素を探求することを可能にしている意味において評価している[5]。さらにこの回心モデルを適用した研究は、研究対象の回心物語の理解のみならず、キリスト教共同体に

1　Cf. Lewis R. Rambo, *Understanding Religious Conversion,* Yale University Press, 1993.（ルイス・R・ランボー『宗教的回心の研究』渡辺学・高橋原・堀雅彦共訳、ビイング・ネット、プレス、2014年を参照）。

2　Cf. Rambo, ibid., pp.7-12（ランボー、前掲書、24-29頁を参照）

3　ランボーの影響を受けたものとして以下の研究が挙げられる。
Cf. Donald L. Gelpi, *The Conversion Experience : A Reflective Process for RICA Participants and Others,* Paulist Press, 1998. /Peter J. Kahn and A. L. Greene, "Seeing Conversion Whole : Testing a Model of Religious Conversion", *Pastoral Psychology,* vol.52, No.3. 2004. /Lynne Taylor, "A Multidimensional Approach to Understanding Religious Conversion", *Pastoral Psychology,* vol.70, 2021, pp.33-51

4　Cf. Scot McKnight, *Turning to Jesus : The Sociology of Conversion in the Gospels,* 2002, p.49

5　Cf. Dong Young Kim, *Rambo's Interdisciplinary Approach to Religious Conversion : The Case of St. Augustine,* Boston University, 2011, p.136

おける牧会現場において、その構成員である教会員の回心物語を理解する助けになるとも述べている[6]。

これらの評価を受けて、本稿ではランボーの回心モデルに倣いつつ、日本人キリスト者を研究対象に定めて回心体験の考察を試みる。具体的には滝沢克己を対象と定め考察を行う。

滝沢を選ぶ理由は 3 点ある。第一に滝沢が長年洗礼を拒みつつもある時を境として受洗を決断した人物であること、第二に第 1 世代のキリスト者による回心体験、つまり、佛教からキリスト教への改宗としての回心であること、第三に研究対象に関する資料が比較的豊富に残されていることである。

先行研究としては回心体験との密接な関係性が指摘できる洗礼に焦点の当てられた金珍熙の「滝沢克己の洗礼に対する再考察」[7] を挙げることができる。金は、滝沢の神学理解とカール・バルトとの往復書簡のやり取りに基づいて、滝沢の洗礼理解を明らかにする。滝沢による洗礼理解に議論の焦点が絞られた金の考察はこれまでの先行研究とは一線を画した論考であり、示唆に富むものである。金は長年洗礼を拒み続けた滝沢が洗礼へと導かれた理由として、佐藤俊男という牧師と日本キリスト教団福岡社家町教会[8] が、滝沢の存在と考えを受け入れてくれたことと指摘している[9]。このように滝沢が洗礼を受けた一連の経緯を探求していくことが彼の回心理解に近づくための手掛かりになると推測する。

とはいえ回心と洗礼は整理して考えるべき事柄ではある。しかし、両者を完全に切り離して考えることは難しい。例えば、ランボーはキリスト教における洗礼のような献身儀礼は、回心する人の決断を証明するうえで重要な目に見える体験であるとする[10]。またキリスト教の洗礼は死と再生のイメージに満ちている。さらに洗礼はその転機をはっきりと記念し、たとえ形式がどのようなものであるとしても、洗礼を信仰

6　Cf. Dong Young Kim, ibid., p.496

7　金珍熙「滝沢克己の洗礼に対する再考察」『今を生きる滝沢克己：生誕 110 周年記念論集』滝沢克己協会編、2019 年、133-149 頁を参照。金によれば、これまでの滝沢研究においては、洗礼は滝沢自身にとって決定的な出来事として重要視されることはなく、周辺的な事柄にすぎないと理解されてきた。つまり、教会の大切さを示す出来事として、あるいは、具体的な共同体としての教会に関心を持っていないという滝沢自身における否定的根拠として、洗礼は理解されてきた。その根拠として、滝沢が洗礼を受けるまでに長い時間を要したこと、並びに、洗礼の前後に注目すべき決定的な変化を見ることが出来なかったということを挙げている。しかし、金は従来のこのような滝沢における洗礼理解を踏まえつつ、異なる視点から滝沢にとっての洗礼を論じている。すなわち、滝沢にとって洗礼は周辺的な事柄ではなく、滝沢自身の問題意識の中心にあり、滝沢の中で働き続けたものではなかったかという視点から洗礼を論じている。ここに金による論考の従来の滝沢研究とは異なる新しさがあると評価できる。

8　以下、社家町教会とする。

9　金、同書、143 頁参照

10　Cf. Rambo, ibid., p.124（ランボー、前掲書、155 頁を参照）

共同体と俗世間との分割線として理解していると述べている[11]。

さらに回心に対するもう一つの疑問として、ある人は回心というとパウロの回心体験に代表される劇的な出来事を想起するかもしれない[12]。しかし、本稿ではランボーの定義[13] に従って、回心を唯一の出来事ではなく宗教的変化のプロセスと理解することで考察を進めていく。

したがって、本稿の目的はランボーによるホリスティックな回心モデルの枠組みをもとにして、滝沢克己の誕生から社家町教会における受洗までの歩みを回心過程と理解することで、滝沢克己の回心とは何かを明らかにすることになる。考察の手順としては、ランボーのホリスティックな回心モデルの内容を確認したうえで、この枠組みをもとに回心の分析を行う。その上で滝沢克己の回心とは何であるのかを論じることになる。

2 節：回心体験分析の枠組み

それではランボーのホリスティックな回心モデルの内容を確認する。ホリスティックな回心モデルは文脈、危機、探求、出会い、相互作用、献身、帰結という 7 段階を辿るプロセスモデルである。

第一に文脈への考察が行われる[14]。回心がダイナミックな文脈において生じるということがここで確認される。このダイナミックな文脈を理解するためには、大きな文脈と小さな文脈に分けて考える必要がある[15]。大きな文脈とは政治体制、宗教団体、経済体制のことであり、小さな文脈とは、家族、友人、民族集団、宗教的共同体、隣人といった小さな共同体のことである。小さな文脈が特定の人に対して、アイデンティティや入信の感情を抱かせたり、人の感情や行動を形成するのに重要な役割を果たす。そしてこの両文脈は色々な形で相互に関係する。このように、大きくて小さい、ダイナミックな文脈に置かれた人たちの中から回心する人が生まれる。

第二にダイナミックな文脈において、回心を求める人は危機的な状況を経験する[16]。この危機的状況には 2 つの形がある。第一に、その人の人生に対する根本的な志向性に疑問を差し挟むような危機であり、第二に、体験それ自体が過酷なことでは

11　Cf. Rambo, ibid., p.129（ランボー、前掲書、160 頁を参照）
12　「使徒言行録」9 章 1-19 節を参照
13　ランボーは、回心を「人々、出来事、イデオロギー、制度、期待、志向などの動的な場において生じる宗教的変化の過程」と定義している。Rambo, ibid., p.5（ランボー、前掲書、21 頁）
14　Cf. Rambo, ibid., p.20（ランボー、前掲書、37 頁を参照）
15　Cf. Rambo, ibid., pp.21-22（ランボー、前掲書、39 頁を参照）
16　Cf. Rambo, ibid., p.44（ランボー、前掲書、63 頁を参照）

ないが、徐々にその人に影響を与える形の危機である[17]。ひとつめの危機体験のように、死や苦しみ、その他辛い体験がその人の人生の解釈を根本的に変えてしまうことは理解しやすいかもしれないが、ふたつめのようにあまり重要には見えないことが実は最終的な引き金になるということがある。

第三に人は自らの置かれた文脈において、何らかの危機を経験することで探求者となる[18]。この探求段階では、探求者の人生の意味と目的が問われる。人は問題解決のために、人生を豊かにするために、積極的に成長と発達を求める。探求者による探求は危機的状況の中にあって著しく活発となる。

第四に探求者は伝道者と出会う[19]。回心は人との出会いによって生じるダイナミックな過程である。

第五に探求者と伝道者の両者が、複雑な一致を果たすことにより相互作用が生じる[20]。自らの思いに応えてくれる伝道者と出会った探求者は集団の教えを学ぶことで、集団へと組み込まれていく機会が与えられるが、それがどれくらいの時間を必要とするのかはそれぞれの集団によって異なる。

第六に探求者は献身の段階へと至る[21]。この場合の献身とは、回心体験において、大切な段階であり、変化過程の支柱と理解されている。この段階において、探求者は献身するか否かの決断に迫られる。献身における決断とは、公の場所で回心者が意志表示することで承認されることである。キリスト教における洗礼のような献身儀礼は回心する人の決断を証明するうえで重要な目に見える体験である。

第七の帰結段階において、回心者の視点から研究者の視点への転換が行われる[22]。第六段階までの視点の主な中心が回心者にあったのに対して、この段階においては視点の軸足が考察を行う観察者へと視点の転換が行われる。この段階においてインタビューによる考察が展開される。

このようなランボーの回心モデルを軸として、滝沢における体験の分析を試みる。しかし、ここで説明された回心モデルの全てが、理想的に滝沢に対して適用できるかどうかは定かではないことを留意しておく必要があるだろう。

17　Cf. Rambo, ibid., p.44（ランボー、前掲書、65 頁を参照）
18　Cf. Rambo, ibid., p.56（ランボー、前掲書、77 頁を参照）
19　Cf. Rambo, ibid., p.87（ランボー、前掲書、113 頁を参照）
20　Cf. Rambo, ibid., p.102（ランボー、前掲書、131 頁を参照）
21　Cf. Rambo, ibid., p.124（ランボー、前掲書、155 頁を参照）
22　Cf. Rambo, ibid., p.142（ランボー、前掲書、175 頁を参照）

3 節：滝沢克己における回心理解

3-1：文脈の段階

滝沢は 1909 年に生まれる[23]。父は禅仏教の寺に属していたが、その後やや国家主義的な法華宗の一派に変わる。第一高等学校を卒業後、東京帝国大学法学部仏法科に入学するが[24]、その後退学し九州帝国大学法文学部哲学科に入学し西洋哲学を専攻する。当時の指導教官は四宮兼之教授である。1933 年、西田哲学に関する論文を執筆し矢崎美盛教授の推薦により『思想』八月号に掲載される。「一般概念と個物－西田哲学の発展の一齣」である[25]。この論文が西田幾多郎からの手紙で認められる[26]。西田に認められた滝沢は 1933 年 10 月にドイツ、ウィルヘルム・フォン・フンボルト協会給費生としてドイツに渡る[27]。渡独直前に鎌倉に、西田幾多郎を訪ね留学中の勉学についての示唆を受けたとされている。そこで滝沢は、西田よりカール・バルトの存在を教えられた[28]。

滝沢の受洗においてバルトとの関係を重視する見方が存在する。例えば仏教学者の星野元豊は「滝沢さんはカール・バルトの切なるすすめによって洗礼を受けたキリスト教徒」[29] であると証言している。そこで、以下、バルトを滝沢の回心における文脈として考察する。

滝沢は 1934 年 3 月までベルリン大学哲学部において学ぶ。翌月よりボン大学神学部において、西田の勧めに従いバルトのもとで学び始める[30]。滝沢が聴いたバルトの処女受胎の講義は、西田哲学から直観的に受け取った問いへの答えに、学問的説明が加えられていたという[31]。しかし、滝沢には越えがたい問題がバルトとの間に生まれる。それが教会の壁の外における神認識の可能性という問題である。滝沢はバルトの神認識を、

23　前田保、『滝沢克己――哲学者の生涯』創言社、1999 年、5 頁を参照
24　坂口博編、『滝沢克己著作年譜』創言社、1989 年、145 頁を参照
25　坂口博編、前掲書、146 頁を参照
26　西田幾多郎『西田幾多郎全集　第十八巻』岩波書店、1966 年、473 頁を参照
27　坂口博編、前掲書、146 頁を参照
28　坂口博編、「何を、いかに、私はカール・バルトのもとで学んだか」前掲書（以下「何を、いかに」）、創言社、164 頁「出立の少し前、わたくしは、京都大学定年退官後、夏中はそこで過ごすのがつねだった鎌倉に西田先生を訪れて、ドイツではだれのところで勉強したらよいかをお尋ねしました。即座に、先生は答えて申されました、『いまのドイツにはとくに勧めたいような哲学者はいない。（中略）哲学者よりもはるかに面白い神学者たちがいる。なかでも、カール・バルトという人はしっかりしている。』」
29　星野元豊・三島淑臣編『野の花空の鳥：滝沢克己先生の思い出』創言社、1986 年、320 頁
30　坂口博編、前掲書、146 頁を参照
31　前田保、前掲書、42-43 頁を参照

「キリスト教の宣教、イエス・キリストを証ししている聖書の外で、同じ真実の救いに会うということは『原理的には可能だが、事実的には不可能である』」[32]

と理解した。また滝沢はこれに関わる問題を日本に帰国後「バルト神学になお残るただ一つの疑問」[33] においても論じている。

「かれの啓示を『聖書』の文字のなかに、『キリスト教会』の厚い壁のなかに、閉じこめてしまうとしたら、イエス・キリストの福音のために、その禍いはいかばかりであろう」[34]

滝沢によれば、もしもキリスト者が、神自らが聖書における特定の時間と空間にとどまると考えるならば、それはキリスト者の恣意的な思い込みである[35]。それゆえに、あらゆるキリスト者も、あるいは、「聖書」や「イエス・キリスト」という名を記憶している人さえも、現在は存在しないという状況に仮に陥ったとしても、それでも「神われらとともに」という事実に人間は結び付けられていると滝沢は述べる[36]。

とはいえ聖書や教会の様々な儀礼による導きは必要である。しかし、聖書を教会の基準ということだけでなく、神的啓示の唯一の源泉、あるいは、まことの神認識の排他的原理としてこれを立てるときには、この信仰は「文字への信仰」に陥ると滝沢は述べる[37]。さらにこのような態度を滝沢は「聖書原理」と呼んだうえで、バルトはこの態度に固執していると述べる[38]。そしてこの疑問がキリスト教会に対する尊敬と感謝を持っているにもかかわらず、洗礼を受けることを妨げているただ一つの事情であると滝沢は告白する[39]。

滝沢がバルトに直接師事していた期間は僅か 1 年あまりであったが[40]、この時期より滝沢とバルトの書簡のやり取りが始まり、バルトの死まで継続した[41]。さらに 1935

---

32 坂口博編、「何を、いかに」前掲書、166 頁

33 滝沢克己、「バルト神学になお残るただ一つの疑問」『佛教とキリスト教』法蔵館、1964 年を参照。この論考は 1956 年 5 月 10 日、カール・バルト 70 歳誕生日祝賀記念論集《Antwort》（『応答』）に《Was hindert mich noch, mich taufen zu lassen》（「何がなおわたくしの洗礼を妨げるか？」）という題で収められたものの翻訳であるということが言及されている。

34 滝沢克己、同書、法蔵館、1964 年、246-247 頁

35 滝沢克己、同書、法蔵館、1964 年、243 頁を参照

36 滝沢克己、同書、法蔵館、1964 年、247 頁を参照

37 滝沢克己、同書、法蔵館、1964 年、247 頁を参照

38 滝沢克己、同書、法蔵館、1964 年、248 頁を参照

39 滝沢克己、同書、法蔵館、1964 年、250 頁を参照

40 坂口博編、前掲書、146 頁を参照。「滝沢克己略年譜」によると、1934 年 4 月よりボン大学神学部において滝沢はバルトに師事する。しかしバルトは翌年 6 月にはバーゼル大学へ移った。

41 S・ヘネッケ、A・フェーネマンス編『カール・バルト＝滝沢克己往復書簡：1934-1968』寺園喜基訳、新教出版社、2014 年を参照。本書は 1934 年 10 月 24 日の日付で滝沢からバルトに向けて書かれた ↗

年 4 月よりマールブルク大学神学部においてルドルフ・ブルトマンに学び、自らの論文「信仰の可能性について」[42] をバルトに送っている[43]。ドイツより帰国した滝沢は、41 年にドイツ留学の成果をまとめた『カール・バルト研究』を刀江書院より刊行する[44]。

バルトと共に展開された神学的な対話の蓄積は、滝沢が洗礼を受けるにあたっての一つのきっかけとなった。しかし、バルトとの関係性を滝沢が洗礼に踏み切った唯一の要因と理解することは難しい。たしかに星野は「滝沢さんはカール・バルトの切なるすすめによって洗礼を受けた」[45] と語ってはいるが、それだけが受洗の切掛けであるとは考えることはできない。この時点における滝沢は知的理解に留まっていたと考えられる。

本節ではランボーのホリスティックな回心モデルに基づいて、滝沢を取り巻く文脈の考察を行ってきた。とりわけ滝沢を取りまく小さな文脈として、西田幾多郎、バルトの存在に着目してきた。しかし、彼を洗礼に至らしめるような劇的な体験が彼らとの間で生じたとは考えにくい。この段階において、滝沢は知的理解の枠内に留まっていたと考えられるからである。ランボーの回心モデルから考えれば、滝沢の決定的な回心の文脈をもたらした実存的体験は山田敬一郎という人物の死である。

3-2：危機、探求の段階

末松英次は滝沢克己と山田敬一郎との関係を次のように述べている。

> 「私が滝沢先生とお附合するきっかけとなったのはやはり亡き畏友 Y 君の交通事故であろう。（中略）彼は医師になってから人生問題に悩み、偶々幼な馴染みで山口高商出身の河波さんの紹介で滝沢先生とお知り合いになったと聞いています。以後研究生から開業医となってからも、先生の大学での講義に特別に許可して頂いて聴講していたようで、先生に私淑して居りました。先生も大変可愛がっておられました。その彼が三二年の九月下旬にオートバイに乗っていて、酔っぱらった進駐軍の自動車に撥ねられて死亡した時、その賠償に際して、先生は未だ米軍の権力の強い時代に一方にはマスコミにも問題を提起しながら、主となって

↘　手紙により始まる。

42　「信仰の可能性について」（以下「信仰」）に関する考察は金珍熙の「滝沢神学の問題意識について：滝沢の初期の神学論文を中心に」『基督教研究』（71 巻、2 号、117-139 頁、2009 年、基督教研究会）が示唆に富む。「信仰」への金の理解によると、この論考の目的はアルキメデス的一点を提示することにある。信仰が成立する根拠は信仰における地盤であるところのアルキメデス的一点に求められる必要があるという。そしてそれが神である。

43　前田保、前掲書、46 頁を参照

44　前田保、前掲書、56 頁を参照

45　星野元豊・三島淑臣編、前掲書、320 頁

交渉に幾度となく板付基地に足を運び当時としては最高額の賠償金を出させました。（中略）先生がY君を如何に可愛がっていたか、それはY君が亡くなった翌年社家町教会で洗礼を受けられた事実は偶然ではないように思われます」[46]

末松の証言によると滝沢にとって山田敬一郎は非常に近しい人物であった。末松と同じく両者を知る高岡忠洋も「交通事故死が先生を受洗にふみきらせた」[47]と証言している。滝沢克己が山田のことをとても大切に思っていたことを、息子である滝沢佐武郎もまた証言している[48]。さらに末松の証言には、滝沢がマスコミにも問題を提起しながら、交渉のために幾度となく板付基地に足を運んだという言葉がある。マスコミへの提起の一つとして、朝日新聞の「滝沢教授の訴え」という記事が挙げられる[49]。この滝沢の記事の中には、教会という言葉が出てくる。これは社家町教会のことを指している。実際に保存されていた社家町教会の週報において、告別の式に関する記録が残されていることが確認された[50]。

残念ながら決定的な記録は今回見つからなかったが、新聞記事並びに週報記録より推測すると、滝沢は社家町教会において執行された告別の式に出席していたとするのが順当であろう。山田の死が10月2日、社家町教会における告別式が6日、新聞記事が9日に出ている。

ランボーの回心モデルに基づくと、山田敬一郎の死の体験は、滝沢にとって危機の段階における第一の危機、その人の人生に対する根本的な志向性に疑問を差し挟む、死や苦しみ、そのほか辛い体験がその人の人生の解釈を根本的に変えてしまう危機に当てはまる。山田敬一郎の死を契機として滝沢は受洗を考え始めたと考えられる。また滝沢はバルトへの1958年8月22日付の書簡で以下のことを書き送っている。

46　星野元豊・三島淑臣編、前掲書、257-258頁

47　星野元豊・三島淑臣編、前掲書、271頁

48　星野元豊・三島淑臣編、前掲書、31頁「山田さんは長年の土曜日だけの聴講生で、父が『よくわかってくれる』とその来訪を楽しみにしていたが、亡くなられて間もなく、秋晴れの土曜日の午後、書斎の縁にさす日をみながら、『山田くんがふっとそこにきて座っているような気がするね』といって、いつものように仕事に向かっている父を不思議な気がしてみた。」

49　「滝沢教授の訴え」『朝日新聞』1957年10月9日、西部、夕刊、125頁「司令官閣下。去る六日故人の親しかったある教会で行われた告別の式のあとで、私はようやく今度の事件の性質について若干のことを思いめぐらす機会と余裕を得ました。一見小さな、社会全体からいうと、ほとんど取るに足りないこの事件に含まれている大きな意味に驚きました。思切ってお手紙をしたためようと決心したのです。（中略）なんの罪科もない山田君夫婦をはね飛ばしたばかりか、すぐに続いて二人までも通行人をひき殺した上自分だけはケガひとつせず、奇怪にも『記憶がない』といい張る一軍曹の非道なやり方の背後に、どうかすると貴国の軍隊や政府そのものの腐らんした正体をみようとします。」

50　日本キリスト教団福岡社家町教会「週報」1957年10月6日「当教会に関係があり、佐藤牧師と特に親交がありました山田敬一郎兄が九月二十八日夜米兵自動車の暴走の犠牲に遭い、（中略）十月二日午後十一時三十三分逝去されました。痛恨限りありません。（中略）山田敬一郎兄の告別式を本六日午後三時から当教会で執行致します。」

「一〇週間ほど前から、しばしばたいへん喜んで、『社家町教会』（駅の近くの通りの名前からとった教会）へ通っています。（中略）私は妻と一緒に洗礼を、ここでたいていそうであるように、今度のクリスマスに受けることができたらと望んでいます。」[51]

バルトとの長年のやり取りの中で、洗礼を拒み続けた滝沢が、社家町教会に通い洗礼を受けるという。この言葉が書かれたのは山田敬一郎の死の翌年のことである。この転換を、ランボーの回心モデルにおいて理解すると、滝沢は探求者になったと解釈できる。

3-3：出会い、相互作用の段階

滝沢がバルトに上記の書簡[52]を書き送るようになった背景には社家町教会牧師佐藤俊男との出会いがあり、最終的に佐藤は滝沢を洗礼へと導いている。佐藤には牧師退任の際にその記念として出版した著書『自然・人間・宗教』[53]がある。同書の「序にかえて」には、佐藤と山田敬一郎との関わりや滝沢受洗の経緯に関する言及が載せられている[54]。「あとがき」にも滝沢受洗に関する言及が行われている[55]。また先程引用した週報の別の紙面に、佐藤の山田敬一郎を悼む文章が「あゝ山田敬一郎君の死」と題して掲載されている[56]。この一連の証言により、社家町教会牧師である佐藤俊男の存在が滝沢の受洗に関わっていることが指摘できる。

本節の議論をランボーによる回心モデルに基づいて整理する。この一連の資料にお

51　S・ヘネッケ、A・フェーネマンス編、前掲書、182 頁

52　S・ヘネッケ、A・フェーネマンス編、前掲書、182 頁

53　佐藤俊男『自然・人間・宗教』中川書店、1998 年

54　佐藤俊男「序にかえて」、同書、5-6 頁「先生はその開放的な性格の故に多方面の人たちとの交流がありました。なかでも、その素朴で人懐っこい人柄を愛しておられた若い医師山田敬一郎氏夫妻の米国軍人過失による交通事故死に際しては、いち早く各界の人たちと連携して米軍に対する賠償交渉に立ち上がられ、ついにこれを認めさせるに至りました。当時九大の倫理学教授であった滝沢克己氏もその一人でありました。（中略）このようなことがあって後、同教授はとし子夫人と共に社家町教会で洗礼を受けられることになりました。」

55　佐藤俊男「あとがき」、同書、201-202 頁「昨年、一九九七年三月三十一日、佐藤牧師は半世紀にわたって奉仕された福岡社家町教会を退任された。生死を分ける戦場での極限状態を生き抜き、人間と宗教の問題を根底から見直してこられた先生によって、わたしたちはいわゆる教会という枠内での制約から離れた自由な雰囲気の中でキリスト教の本質について学ぶことができた。また一哲学徒としての立場を固執してこられた滝沢克己教授が、ご夫妻で受洗されたのもこのような雰囲気のもとであった。」

56　日本キリスト教団福岡社家町教会「週報」1957 年 10 月 6 日「エリー軍曹とかいう黒人の米兵がどういうつもりか、九月二十八日の夜十一時頃、板付国道を八〇キロのフル・スピードで自動車を暴走させた。その車輪の下に日本人四名が三度にわたってはねとばされ、下敷になった。おそるべき犯罪である。そして、愛する山田君夫妻がその最初の犠牲者だったのだ。（中略）『死とは何か！』。私は答えられない。聖書が答えてくれるだろう。さしあたり山田君が『死とはこんなものですよ』と私に語ってくれそうな気がする。静かにきこう。」

ける証言より、山田敬一郎の存在が、滝沢と佐藤を出会わせ、両者の関係性を強固なものへと変化させていったとするのが妥当であると思われる。ランボーの言葉で表現すると、山田敬一郎の死が滝沢と佐藤の相互作用を強めたと評価できる。また上記の滝沢の言葉にもあるように、社家町教会と滝沢の結びつきも日々の教会生活の積み重ねによって、徐々に強められていったことも理解できよう。そして牧師との親交、教会への参与が洗礼へと帰結したのは必然であると言える。

3-4：献身の段階

滝沢は「わたくしの受洗と『洗礼』の本質」[57]の中で第二次大戦後の間もない頃に山田敬一郎と出会ったこと、彼が滝沢の土曜日の講義に出席するようになったこと、自分の弟のように親しく付き合いをしていたこと、彼がキリスト教会に通っていたこと、しかし、信仰に入ることができていないこと、さらにアメリカ軍軍人の運転により突然にして彼の命が奪われたことに言及した上で洗礼を躊躇う必要はなかったと述べている[58]。

たしかに、バルトとの間にある聖書原理という問題が解決されたわけではないが[59]、佐藤牧師と社家町教会が滝沢を受け入れてくれると言っている以上、洗礼をこれ以上ためらう理由はないという。58 年 5 月には洗礼を受ける意思をバルトにも伝えている[60]。こうして滝沢は 1958 年 12 月 21 日[61]、49 歳の時に佐藤俊男牧師より社家町教会においてとし子夫人と共に[62] 洗礼を受けた[63]。

ランボーによれば、献身とは回心体験において重要な目に見える変化過程である。この献身の段階で人は決断を迫られる。決断とは滝沢の場合、社家町教会において洗礼を受けることであろう。洗礼を受けることは決断を証明するうえで目に見える体験である。このように考えると滝沢受洗の出来事は彼自身が決断を下した献身の段階と

57　坂口博編、「何を、いかに」前掲書、179-182 頁を参照

58　坂口博編、「何を、いかに」前掲書、180 頁「牧師－名前は佐藤俊男と申しますが、かれはわたくしに、教会にはいる意志はないかと尋ねました。かれはまた、これまでのようにキリスト教を絶対視することはできないということを認めたうえ、福音宣教のためにかれを助けてくれるようにと、わたくしに要請しました。わたくしはむろん福音の宣教にかんして、とくにかれを助けることができるなどと思ったわけではありませんけれども、いまはわたくしの側として、それ以上洗礼を受けることをためらう何の理由もありようはなかったのです。」

59　滝沢克己、前掲書、「バルト神学になお残るただ一つの疑問」を参照

60　S・ヘネッケ、A・フェーネマンス編、前掲書、160-162 頁「知人に佐藤俊男牧師という人がおり、（中略）彼が最近私に言われるには、自分は牧師として、神学的にも、私が決心しさえすれば、自分の福岡社家町教会で洗礼を受けることについて何の反対もないということなのです。（中略）ですから私は、やっと今年、おそらくクリスマスに、佐藤牧師のもとで洗礼を受けることをついに決心したのです。」

61　日本キリスト教団福岡社家町教会「週報」1958 年 12 月 21 日を参照

62　前田保、前掲書、100-101 頁を参照

63　この日の礼拝の聖書箇所はルカによる福音書 2 章 8-20 節、説教題は「急ぎ行く羊かいたち」である。日本キリスト教団福岡社家町教会「週報」1958 年 12 月 21 日を参照

評価できる。

3-5：帰結の段階

3-5-1：これまでのまとめ

滝沢は西田との関わりの中でバルトを知る。その後バルトとの往復書簡による神学的な対話を続ける傍らで[64] 山田と出会う。山田は大切な存在となったが[65] 不慮の事故により山田の死を経験する[66]。共通の知人であった佐藤の導きで洗礼を受けるに至る[67]。滝沢は山田の死を経験する以前には聖書原理の問題に頑なに拘り、バルトの態度を批判していた[68]。またこの問題が洗礼を受けることを妨げる事情であると述べている[69]。それにも関わらず山田の死を契機として佐藤牧師に「教会にはいる意志はないか」[70] と言われた滝沢はもはや洗礼をためらう理由はなかったと述べている。そして滝沢は社家町教会において洗礼を受けたのであった。

ランボーの回心モデルの第六段階である献身までは、これまでの考察のように比較的順当に滝沢に適用することが可能であったと言える。しかし、滝沢の内奥における変容の詳細、聖書原理への批判を根拠に洗礼を拒絶していた滝沢の理解の転換についてはまだ明らかではない。そこで第七段階においてはこれらの疑問に取り組む必要があるであろう。

3-5-2：インタビュー調査

ランボーによれば、帰結の段階では回心者の視点から観察者の視点への転換が行われる。第六段階までの視点の主な中心が回心者にあったのに対して、この段階においては視点の軸が考察を行う観察者へと転換するという。言い換えるならば、第三者による回心への評価が展開されるのが帰結という段階である。そこでこの理解に基づいて、本稿では滝沢のことをよく知る証言者へのインタビュー調査に基づく考察を展開していきたい。

そしてここでの考察を行うにあたっての課題は第六段階までの回心過程の分析を通して生じた一つの疑問を中心に考えていくことである。つまり、長年の間頑なに洗礼を拒んでいた滝沢が洗礼を受ける決断を行うに至る変化過程の中にどのような体験があるのかという問いである。この問いを探求することが滝沢の回心理解を明らかにす

64　S・ヘネッケ、A・フェーネマンス編、前掲書を参照
65　坂口博編、「何を、いかに」前掲書、180 頁を参照
66　「滝沢教授の訴え」『朝日新聞』1957 年 10 月 9 日、西部、夕刊、125 頁を参照
67　S・ヘネッケ、A・フェーネマンス編、前掲書、160-162 頁を参照
68　滝沢克己、前掲書、法蔵館、1964 年、248 頁を参照
69　滝沢克己、前掲書、法蔵館、1964 年、250 頁を参照
70　坂口博編、「何を、いかに」前掲書、180 頁

るにあたっての手がかりとなる。

筆者は滝沢を知る牧村元太郎氏にインタビューを行った。牧村氏は生前の滝沢を直接知る人である。牧村氏は 1943 年生まれ、九州大学時代の滝沢の教え子であり、彼が 18 歳の時に滝沢が 52 歳である。滝沢が洗礼を受けた約 3 年後に牧村氏は九大に入学した。彼は滝沢による指導のもとで九州大学大学院の後期課程まで進み、ベルリン自由大学に留学、帰国後は牧師となる。5 年前に社家町教会牧師となり今に至る[71]。

牧村氏によると、滝沢はもともとバルトには洗礼を受けないと言っていた。しかし、社家町教会で受け入れると言われた。滝沢としてもイエス・キリストに従うことで歩んでいこうと考えているがゆえに、洗礼を拒む理由はなくなったという。確かにバルトに対する疑問は残っている。それはキリスト教のキリスト教第一主義という姿勢への批判であり、人間イエス・キリストの一番の核、福音書のイエスがそこに立って語るような根源的な核、インマヌエルという核を抜きにして、イエス・キリストを絶対化することや、イエス・キリストの名前を根源から切り離し主張することにより仲間を増やしていこうという姿勢を滝沢は批判していた。それゆえ、このような集団には入らないという意味で洗礼は受けないとバルトには伝えていた。しかし、滝沢にとって一番大切なことはイエス・キリストと共に生きることであった。そして受け入れてくれる教会が出てきたから、洗礼を受けるということで、連れ合いのとし子と共に洗礼を受けることになったという[72]。

この一連の内容はこれまでの考察と一致している。牧村氏の話の中で「インマヌエルの核」という言葉が出てくる。牧村氏はこれについて、滝沢の姿の中に神の広がり、あるいは、あるがままで受け入れられるような感じがあったと語っている[73]。滝沢自身は意味について、『自由の原点・インマヌエル』[74] において、人間存在の根底的状況の根本的変化と定義している。インマヌエルとは人間がこれを離れては事実上成り立つことのできない実在的基点であり、全ての人間の営みもまたこの基盤の上に成

71　インタビュー調査に基づく回心研究を行うにあたって、原敬子の『キリスト者の証言：人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』（教文館、2017 年）に示唆を受けている。牧村元太郎氏には筆者が研究論文に対話記録を資料として用いることを伝え了承を頂いた。IC レコーダー（予備含め 2 台）に記録した言葉の中で、本研究に関わる内容を文書化し、牧村氏に確認頂いたものを資料として使用している。尚、インタビューは二度行った。2021 年 7 月 6 日における一度目は対面形式において、2021 年 9 月 7 日の二度目は Zoom におけるオンライン上において行われた。以下 IC レコーダーにより記録された滝沢についての牧村氏へのインタビュー記録に基づく考察である。
「牧村元太郎牧師インタビュー記録」(1)、2021 年 7 月 6 日（火）13 時 15 分－15 時、日本基督教団福岡社家町教会牧師館、語り手：牧村元太郎牧師、聞き手：髙木政臣「牧村元太郎牧師インタビュー記録」(2)、2021 年 9 月 7 日（火）14 : 30-15 : 30、話し手：牧村元太郎牧師、聞き手：髙木政臣、実施方法：Zoom、記録方法：IC レコーダー。以下「インタビュー記録」とする。

72　「インタビュー記録」(1) 2021 年 7 月 6 日を参照

73　「インタビュー記録」(1) 2021 年 7 月 6 日を参照

74　滝沢克己『自由の原点・インマヌエル』新教出版社、1969 年を参照

り立っているという。それが滝沢におけるインマヌエルであり[75]、牧村氏はこのことを体験したと次のように語っている。

牧村氏によれば、この体験があったのは路面電車に乗っていたときのことである。その日は雨で、牧村氏は窓の外をぼんやりと見ていた。電車の中で、揺られるままに、体を揺られていたときに突然はっとして[76]自分自身の存在の根源にあるものに出会ったという。その時に滝沢の言うことは本当であり、そこに固い確かなものが存在していることに気が付いたという。これが神と共にある体験だったと牧村氏は語る[77]。この証言より、神と共にあることを認識すること、神との関係性を意識することがインマヌエルであるということが理解できる。また牧村氏は滝沢の洗礼についてはこのように語る。

> 「知的な理解中心から、生活的なものの重視へという、そういう、重心の、自分の生活をこう信仰に関わる生活の重心が知的なものから実践的なものへとずれてきた。そういう感じなんじゃないかな」[78]

牧村氏がここで語る「ずれ」としての洗礼は、信仰の知的理解からの飛躍とは異なる体験なのか。牧村氏は、滝沢にとっての洗礼が、知的な理解を超えて回心が起こったというような大きな飛躍としての出来事ではないと語る。あくまで洗礼は知的な理解中心から生活的なものの重視という重心の「ずれ」であって、これまでの継続の中で生じたものとして牧村氏は滝沢の洗礼を語る。

このように洗礼は回心というほどに大きな出来事ではなく、これまでの継続の中で生じたこととの証言は、洗礼が回心過程におけるひとつの儀礼であるとの、これまでの本稿における考察にも対応する。その上で牧村氏は次のように言葉を加えている。たしかに信仰生活の中での立ち位置という意味では少しは飛躍があったかもしれない。しかし人生の大きな転換という意味での飛躍ではなかった[79]。

さらに滝沢が教会に通い始めたのは、洗礼を受ける前後からであるという。そしてそれまでの滝沢が教会に通うことはなかったのかという問いには通っていなかったというように語られた[80]。

牧村氏によれば、洗礼を受ける前後からの、滝沢の社家町教会おける働きが非常に

75　滝沢克己、同書、17 頁を参照
76 「インタビュー記録」(2) 2021 年 9 月 7 日を参照
77 「インタビュー記録」(2) 2021 年 9 月 7 日を参照
78 「インタビュー記録」(2) 2021 年 9 月 7 日
79 「インタビュー記録」(2) 2021 年 9 月 7 日を参照
80 「インタビュー記録」(1) 2021 年 7 月 6 日を参照

盛んであるという。連続講演会を毎月実行していた時もあったという。滝沢が主任教授であったときの倫理学教室でかつて一緒だった知人が、社家町教会の週報を調べまとめているが、ありとあらゆるテーマで滝沢は講演会をしているという[81]。さらに滝沢が洗礼を受けたことを牧村氏は次のようにも語る。

「洗礼を受けたということはこうイエス・キリストに用いられるというか、使命感そういうまさに召命ですよね。そういう召命観みたいなものを感じられたのかな」[82]

洗礼を受けることは、滝沢にとってイエス・キリストに用いられることであり、召命観と一体である。洗礼を契機として滝沢の語りの場が、知的な枠組みとしての大学から一般の人たちへと広がった。それまで滝沢の語る場は大学であった。しかし、その大学という知的な枠から超え出ることで、洗礼を受けてからの滝沢は語りの場を教会に移していったと語る[83]。

このように、生前の滝沢を知る牧村氏へのインタビューを通して、文献による考察だけでは理解し得ない滝沢への理解が明らかになった[84]。特に、滝沢が洗礼を受けるに至る変化の中にどのような体験があったのかという問いに対しては重心の「ずれ」が生じたという応答ができる。牧村氏の解釈に基づくと、重心の「ずれ」とは滝沢にとって知的なものから実践的なものへの重心の「ずれ」である。イエス・キリストが大学という知的な議論の場から実生活の中に入りこんでくる過程である。さらにこの重心の「ずれ」をもたらす一つの契機を作ったのが山田敬一郎の死であると本稿では理解している。さらにランボーのホリスティックな回心モデルに基づいて、滝沢の歩みの分析を行った結果、滝沢には回心体験が存在することが確認できた。そのうえでこの一連の考察を踏まえて本稿を貫く問いにこたえたい。

3-5-3：帰結としての回心理解

滝沢の回心とは神と人との関係性に支えられた重心変化の過程である。この過程は神との関係性に支えられている。滝沢はこれをインマヌエルと表現する。そして人と

81 「インタビュー記録」(1) 2021 年 7 月 6 日を参照
82 「インタビュー記録」(2) 2021 年 9 月 7 日
83 「インタビュー記録」(2) 2021 年 9 月 7 日を参照
84 牧村氏が重心の「ずれ」と述べている洗礼を、滝沢自身は「何を、いかに」(坂口博編、前掲書、179-182 頁を参照) において、洗礼とはキリスト者であることの必然的な徴しであると述べている。そしてこの徴しは二重の意味で必然的な徴しである。即ち、原事実インマヌエルが信仰に先立って存在していること、並びに、このインマヌエルの原事実に目覚めるに至ったことという二重の意味における必然的な徴しである。

の関係性においても支えられている。本稿では西田幾多郎、バルト、山田敬一郎、佐藤俊男に着目してきた。またこの過程は信仰の知的なものから実践的なものへの重心変化の過程である。これはイエス・キリストの存在が大学という知的な場から教会をはじめとする生活に関わる実際的な場へと移り行く過程である。重心とは自らを捧げる場のことである。重心は検証可能な目に見える場であると同時に検証不可能な目には見えないイエス・キリストと共なる場でもある。

滝沢は『続・仏教とキリスト教』において「その罪の全き赦しにいたる門、すなわち根本的な回心と新しい命への道が、いかなる瞬間にも開かれています。この門、この道こそは、同時に真理であり生命である（ヨハネ十四・六）人間イエス自身の《わたし》」[85] であると述べている。神との関係性、並びに、西田幾多郎、バルト、山田敬一郎、佐藤俊男との関係性を通して、イエス・キリストの存在が知的な場から生活に関わる実際的な場へと移り行く過程が滝沢の回心である。それゆえ神と人との関係性に支えられた重心変化の過程が滝沢における回心である。

４節：おわりに

本稿では、滝沢克己を研究対象と定めて回心体験の分析を行った。分析の枠組みとしては、ランボーの回心モデルを用いた。ランボーの回心モデルは、ホリスティックな回心モデルと呼ばれ、文脈、危機、探求、出会い、相互作用、献身、帰結という 7 段階を辿るプロセスモデルであった。

第一の段階として、滝沢を取り巻く文脈の考察を行った。とりわけ滝沢を取りまく小さな文脈として、西田幾多郎、バルトの存在に着目してきた。第二の段階として、山田敬一郎の死の体験を、滝沢にとって危機の段階における第一の危機、その人の人生に対する根本的な志向性に疑問を差し挟む、死や苦しみ、そのほか辛い体験がその人の人生の解釈を根本的に変えてしまう危機として捉え整理してきた。第三の段階として、社家町教会に通うようになったことを探求者としての滝沢の姿と捉え、第四の段階において、その歩みによって生じた佐藤との関わりを出会いとして捉えることとなった。さらに第五の段階において、佐藤牧師と社家町教会との関係の積み重ねを相互作用として捉えたうえで、第六の段階として滝沢の洗礼を献身と位置付けてきた。

そのうえでランボーの回心モデルの六段階までの過程を滝沢に適用していく作業を通じて、一つの疑問を見出すに至った。それが、長年頑なに洗礼を拒んでいた滝沢が洗礼を受ける決断を行うに至る変化過程の中にどのような体験があるのかという問い

85　滝沢克己「教会について－ヨハネ福音書、とくにイエスの別辞を手引きとして－」『続・仏教とキリスト教』法蔵館、1979 年、150 頁

である。

本稿ではこの問いを明らかにするために牧村氏へのインタビュー調査を行った。このインタビュー調査を通して、知的な理解中心から生活的なものの重視へという重心の「ずれ」が生じたという答えが導き出された。

この一連の考察を踏まえて、滝沢の回心とは何かという本稿を貫く問いに、滝沢の回心とは神と人との関係性に支えられた重心変化の過程であるとの答えが得られた。

このように、ランボーのホリスティックな回心モデルをもとに滝沢の歩みを分析するときに、滝沢には回心体験が存在したと解釈できる。ランボーの回心モデルを滝沢の歩みに適用した本稿における回心の分析は妥当なものであると考えられる。

しかし一方で、ランボーのホリスティックな回心モデルの危機段階における第二の危機であるところの、体験それ自体が過酷なことではないが、徐々にその人に影響を与える形の危機を、滝沢克己の事例から導き出すことは出来なかった。この点については今後の課題のひとつとしたい。

【ABSTRACT】

Conversion by Katsumi Takizawa Based on the Methodology of Lewis R. Rambo

TAKAGI Masaomi

This paper seeks to answer the question of the meaning of conversion for Katsumi Takizawa. Based on the framework of Rambo's holistic conversion model, this paper presents Takizawa's journey from his birth to his baptism at Shakemachi Church as his process of conversion.

First, we will examine the Rambo's holistic conversion model. His conversion model consist of a seven step process involving context, crisis, quest, encounter, interaction, commitment, consequences. Context is the dynamic situation in which conversion takes place. Crisis can be divided into a crisis which casts doubt on one's fundamental direction in life and a crisis gradually affecting a person even though their life experiences might not be harsh. Through experiencing a crisis, a person becomes a seeker on a quest. They search for life's meaning and purpose. Furthermore, the seeker's search intensifies through an encounter with the advocate. Finally, the seeker must decide of whether to commit or not. In the light of this process, by shifting our perspective from the convert to that of the researcher we can analyze the meaning of conversion.

Next, we will analyze Katsumi Takizawa's conversion based on this holistic conversion model. Takizawa's context forms stage one. We will focus on Kitaro Nishida and Karl Barth as Takizawa's immediate context. The death of Keiichiro Yamada triggers stage two. Takizawa's attendance of Shakemachi Church marks him as a stage three seeker on a quest, and the resulting relationship with Rev. Sato constitutes the stage four encounter. Takizawa's deepening connection with Rev. Sato and Shakemachi Church forms stage five interaction and his baptism the stage six commitment.

Applying the different stages of Rambo's conversion models to Takizawa's experiences leads to the following key question : What experience in Takizawa's development caused him to decide to be baptized even though for years he had consistently refused to get baptized? Based on an interview conducted with a student of Takizawa's, Gentaro Makimura, this paper argues that Takizawa's commitment resulted from an internal shift of emphasis from the intellectual to the practical.

The paper concludes that for Takizawa conversion entails the process of the shift of emphasis sustained by the relationship between God and people.